ブルーベリーの里づくり

～農の担い手と農村の活気を取り戻すために～

千葉県いすみ市　尾形　和宏

はじめに

私は、地域をブルーベリーの里にしたい。

知人であるブルーベリー農家の栽培に対する意欲、栽培技術の蓄積、耕作放棄地活用への思い、ブルーベリーにおける地域の適地性を聞かせてもらったことで関心を持ち、私のやりたいことを重ねてみたいと思ったからである。

高齢化のため稲作を退いた農家や稲作をやめた勤め人に代わり、その農地を借りる大規模営農者が田園風景を維持しているが、水田の管理は丁寧さが失われ、畔には雑草が生い茂っている。

田園風景が美しいと評価されることは地域の魅力であるが、生活基盤が農地から離れていくことで増える耕作放棄地や行き届かない水田管理を静観していては、農村地域の心意気を回復できない。

この地の主要な農産物としてブルーベリーが名乗りを上げ、農の担い手獲得と農村活性に活路が見出せるか考えたい。

１　いすみ市の現状

１－１　いすみ市の概要

いすみ市は、房総半島の東南部、九十九里浜の南端に位置し、気候は温暖で、首都圏でありながら里山・田園・夷隅川・里海が織りなす原風景を有している。全国有数の漁獲高を誇る伊勢エビをはじめ、タコ、サザエ、アワビ、ヒラメ、鯛等が獲れ、内陸には肥沃な土地を活用し、コメや梨、花の栽培、キャベツ等の野菜づくりが行われ、市内には豊かな農産物の直売所が数多く存在する。海岸にはアカウミガメが産卵、田園にはコハクチョウが飛来、希少な動植物が共生する自然豊かな地域である。

図１　いすみ市位置

市の人口 40,098 人(平成 27 年 11 月)のうち、高齢者人口は 14,814 人で高齢化率 36.9%、年少人口は 3,788 人（9.4%）と、少子高齢化の進展による人口減少に歯止めがかからず、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口（平成 25 年 3 月推計)」によると、今後も市の人口減少は進み、2040 年（平成 52 年）には、約 27,000 人にまで減少すると推計されている。

１－２　いすみ市の農業の状況

いすみ市は、千葉の三大米の一翼を担ういすみ米の生産地である。良質な土壌に恵まれ、マグネシウムを多く含んだ粘土質の水田で育まれた米は、味をしっかり感じることができ、噛むごとに旨みと粘りが口に広がる。

市内の主な農産物の作付面積と収穫量をみると、米 2,110ha で 11,300ｔ、キャベツ 27ha で 864ｔ、トマト 5ha で 282ｔ、キュウリ 8ha で 276ｔ、大根 23ha で 1,028t となっている。

平成 26 年のＪＡへの出荷量から米 4,200ｔ、梨 350ｔと続くが、地元ではおいしい梨として推すものの、全国１位の生産量 34,400 トンを誇る千葉県の梨のなかで、市川市や白井市、鎌ヶ谷市等の産地に比べると生産量は多いとはいえない。いすみ市の農業は、水稲中心の地域であり、わずか出荷量 4ｔのブルーベリーの存在感は非常に薄い。

市内の農業生産者の状況を平成 22 年の国勢調査でみると、第 3 次産業就業者の割合が最も高く 65.4%を占め、次いで第 2 次産業が 26.2%、第 1 次産業は 8.4%となっている。全国や千葉県と比べると第 1 次産業の就業者の割合は高く、農業と漁業を主産業とする地域といえる。（表 1）

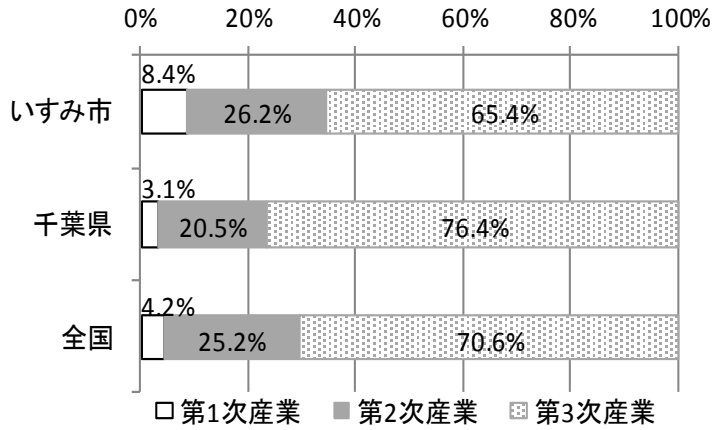

表１　産業三部門別就業者数の割合（いすみ市、千葉県、全国）出所：平成 22 年国勢調査

いすみ市の年齢別農業就業人口の構成をみると、65 歳以上が 70.7%、60 歳以上で 84.8%と農業就業者の超高齢化に差し掛かっている。（表 2）

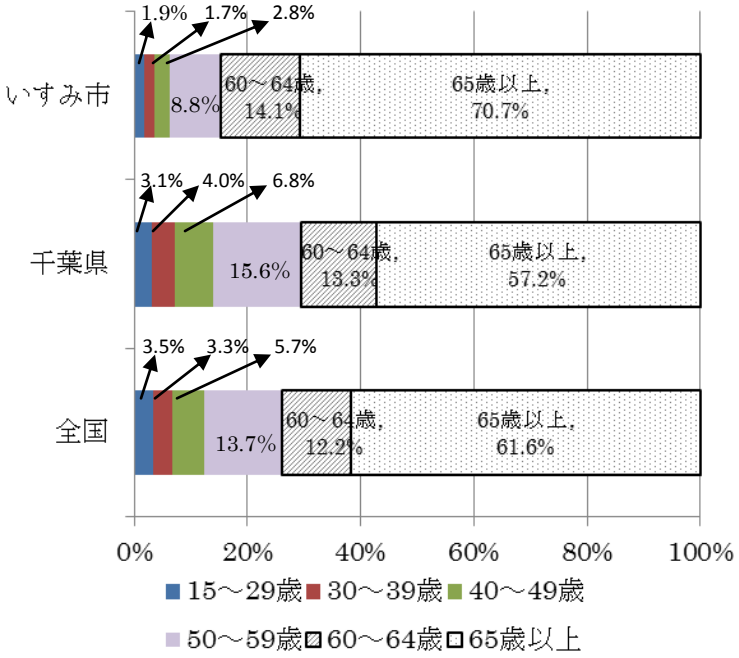

表 2　年齢別農業就業人口の構成
出所：世界農林業センサス 2010

また、市内の農家 1,980 戸のうち、自給的農家が 565 戸、販売農家が 1,415 戸となっている。販売農家の内訳は、専業農家が 336 戸、農業収入が全収入の 5 割以上の第 1 種兼業農家が 171 戸、農業収入が全収入の 5 割以下の第 2 種兼業農家が 908 戸となっている。

新規就農者数は、平成 22

年度から 26 年度までは平均 2 件と推移し、27 年度は 6 月から新規就農の面積要件を 20a に緩和したことが影響したのか、8 件となっているが、ほとんど稲作での就農である。千葉県内の新規就農者数は、平成 20 年度に 256 人、21 年度には 321 人と増加傾向にあることをみると、いすみ市は米以外の産地化への活発な動きがみえないことから、新規就農者を呼び込めていないのではないか。

また、年齢別農業就業人口の構成が 60 歳以上で 84.8％という状況からも、これまで収益が上がらない水稲への依存が高く推移してきたことで、担い手不足に拍車がかかる状況にあると推測する。

なお、いすみ市の耕作放棄地の面積は、平成 17 年に 764ha、22 年に 778ha、27 年に 761ha と推移しており、これは東京ディズニーランドの面積約 15 個分、東京ドームのグラウンド部分の面積約 585 個分に相当する。

１―３　外貨をもたらすいすみ市への入込客の状況

平成 25 年に首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の木更津東ＩＣから東金ＪＣＴ間が開通した。圏央道の延伸は、東京、神奈川方面といすみ市との所要時間を大幅に短縮し、観光客をはじめ流動の活性化が期待されている。国土交通省千葉国道事務所によると、開通後のアクセス性が向上したことでゴールデンウィーク期間中の観光入込客数は、開通前と比較すると 2 年連続で増加している。九十九里地域では 1 年後に 28％増、2 年後に 25％増となっており、南房総地域では 1 年後に 61％増、2 年後に 75％増となっている。いすみ市の観光入込客数は開通前の平成 24 年度 26 万人に対して、開通した 25 年度 31 万人で 19％増、26 年度 32 万人で 23％増と、増加傾向にある。

また、平成 25 年 5 月から地域活性化を目的にいすみ市商工会（港の朝市運営委員会）が主催となり、現在毎月 2 回開催している港の朝市では、平成 25 年度開催日の売上平均額は 270 万円、26 年度は 387 万円と好調であり、平均来場者数も平成 25 年度の開催日平均 3,000 人、26 年度は 4,000 人と推移している。

さらに、ターゲットを絞った観光事業の展開と積極的なＰＲ活動を行い、地域のお荷物から誇りに変わったいすみ鉄道の集客も見逃せない。

首都圏に位置しているいすみ市は、圏央道の開通でさらにアクセス性が向上し、対岸の都市住民の身近な田舎となり、地域経済にとって外貨獲得の機会を広げている。

２　ブルーベリーの概要と特徴

ブルーベリーは、ツツジ科のスノキ属の小果樹で、その果実が濃い青紫色に熟すことからブルーベリー（Blueberry）と呼ばれている。原産地は北米で昔から、野生のブルーベリー果実を摘んで食用にしていた。美しく可憐な花を咲かせ、4 月上旬から約１ケ月間開花し、果実は緑、赤、青と色を変化させ、成熟すると紫黒色（青藍色）になり、果面に白い粉を被る。大きさは 1～4ｇ程度で、熟期は 6 月上旬～9 月上旬まで続き、その後は鮮やかに紅葉し、種類により 10 月の中旬から、遅いものは 12 月から年明けまで楽しめる。

日本に伝わったのは 1951 年（昭和 26 年）、北海道農業試験場がアメリカから導入したの

が始まりといわれ、1968 年（昭和 43 年)、日本初のブルーベリー栽培園が東京都小平市に誕生し､ブルーベリーが本格的に栽培されるようになったのは 1980 年代後半とされている。

ブルーベリーの生産量は、1 位のアメリカ（21 万ｔ)、2 位のカナダ（12 万ｔ）を合せると、世界の生産量の 80%以上を占めており、日本は 1 千トンを超えるが遠く及ばない。

日本におけるブルーベリーの栽培面積は昭和 50 年以降、平成 22 年まで 35 年間一貫して拡大しており、平成 22 年現在の栽培面積は 1,041ha、収穫量は 2,259ｔとなっている。

また、収穫されたもののうち、市場等に回される出荷量は現在 70%くらいとのことで、その量は約 1,400ｔとなり､残り 30%の約 800ｔが直接消費者に摘み取り園等で販売されているものとみられている。

昭和 56 年以降、一貫して長野県が生産量トップの座を占めてきた日本の産地を市町村別にいくつか挙げると、北海道（赤井川村)、岩手県（一関市)、山形県（羽黒町)、茨城県（つくば市)、群馬県（川場村)、長野県（ほぼ全域)、石川県（能登町)、千葉県（木更津市）等がある。

ちなみに千葉県における栽培面積は約 35ha (平成 20 年) であり､主な生産地は木更津市、富津市、千葉市、睦沢町、いすみ市となっている。

日本で栽培されているブルーベリーを大きく分類すると、ハイブッシュは寒さに強いため、日本では北海道、東北、関東、北陸などで栽培され、粒が小さめなラビットアイは、寒さに弱いため、日本では関東南部から中部、中国、四国、九州などで栽培されている。

いすみ市では、概ね 5 月下旬から 6 月下旬まではハイブッシュ、7 月上旬から 9 月上旬まではラビットアイの収穫期となっている。

ブルーベリーの果実の中には、眼精疲労回復や生活習慣病の改善などに効果的なアントシアニンという優れた抗酸化作用を持ち、また、アントシアニンが花粉症のつらい症状を緩和することもわかっている。その他にもブルーベリーは、豊富な量の食物繊維が含まれているバナナと含有量で比べると、約 2.5 倍もある健康食品である。

３　市内のブルーベリー栽培の現状

３－１　地元のブルーベリー販売農家に聞く－藤江　信一郎さん

いすみ市山田地区に住む藤江さんは、ブルーベリーを 25ａの農地で 500 本、イチジクを 10ａの農地で 130 本栽培している。「お客様の口は、私の口」をモットーに消費者に安全な食品を安心して食べてもらえるよう、ブルーベリーは無農薬・無化学肥料で栽培し、イチジクは桝井ドーフィンをできる限りの減農薬で栽培し販売しているほか、観光農園を運営しジャム加工もしている。

果樹栽培の他では、一棟貸の農林漁業体験民宿のコテージを経営し、週末はコテージファン、夏休み期間は子供連れの家族が利用している。

さらに、ソーラーシェアリングの取組みを始めた。これは、農地で農作物の栽培を行い、農地の上部で太陽光発電を行うものであり、適度な遮光であれば作物に影響がないとされ、副収入を見込んでいる。

以前は、稲作の兼業農家であったが、農業機械への多額投資や基盤整備されていない水

田での稲作に限界を感じ、米に代わる作物を考えるようになった。市内でブルーベリーを栽培する農家から話を聞くうちに、小規模でも複合的に経営すれば自立していけると感じたことが、ブルーベリーを栽培するきっかけとなった。

藤江さんは、これまでに多くの移住希望者の相談対応を経験され、せっかく地元を気に入り移住したいというのに就業支援ができないことを悔やんでいた。せめて若者や 50 代退職前の夫婦等が田舎へ移住して農業をしたいのであれば、農業で自立していけるスタイルの一つとして、稲作から転換した自らの経緯を基に提言しているそうだ。低木性の果樹であるブルーベリーは、女性の就農にも向いている作物と話す。

ブルーベリーを耕作放棄地で栽培する場合、土地を整備し、植える場所を 120 ㎝の幅にして畝上げする。ブルーベリーは酸性土壌（PH4.3～5 前後）を好むため、畝上げした土とピートモスを混ぜて酸性土壌にする。藤江さんは、十分生育した 2 年生の苗を植えてから 2 年間は実をつけないように剪定して、苗木の生育に注力し、植えてから 3 年目の 5 年生ではじめて収穫する。そうすることで、その後の約 30 年間、良い実をたくさんつける強い木に育つそうだ。

ブルーベリー栽培における初期投資は、1 反（10ａ）あたり約 150 本の苗木を目安に植える場合、耕作放棄地等の借地料と、苗木 1 本あたり 2,500 円程度の購入経費が必要となり、概ね 350,000 円～370,000 円だという。ヒヨドリなどからの被害対策として 7 月上旬頃までは防鳥ネットが必要となる場合がある。

収穫期の労働力は、夫婦とパート 1 名の 3 名が午前 8 時から約 4 時間の収穫作業で平均 20 ㎏ずつ収穫する。午後からは 2 時間程度の選別と出荷作業を基本としている。

ブルーベリーの栽培面積を 5 反（50ａ）とした場合、夫婦とパート 3 名が必要となり、ハイブッシュとラビットアイの 2 系統を栽培して収穫期を分けることが望ましいという。

ＪＡいすみの平成 27 年の出荷状況では、他産地より早めに出荷できるハイブッシュの品種は 5 月下旬から 6 月上旬は 1 ㎏約 3,000 円と高値で取引されるといい、いすみ市での栽培の強みといえる。最盛期の 8 月には産地からの出荷量が増えることから、ラビットアイの品種となると 1 ㎏約 1,200 円まで値が落ちてくるという。

ちなみに藤江さんの収入とその割合は、ＪＡいすみ 30%、加工品を含む直販 50%（うち摘み取り体験 20%）、ケーキ等の洋菓子店(3 件)10%、地元直売所（1 件）10%とのことである。

ブルーベリーを軸に、収穫時期の違う作物を 1 つまたは 2 つくらい栽培することや集客を見込む複合的な経営で自立していけると話されていた。

３－２　市内で進むブルーベリー農家の組織化

平成 16 年、いすみ市で先駆的にブルーベリーの栽培を始めた 6 世帯の農家は、栽培を通じて生きがいと所得の向上を図りながら、栽培の難しさや楽しさ及び認知度を高めていくことを目的に、いすみブルーベリー振興会（以下「振興会」）を設立した。専業農家、兼業農家、自給農家等の加入により、平成 27 年 10 月現在のメンバーは 28 世帯 42 名となっている。年に数回、技術向上や会員相互の親睦のための剪定講習会を実施している。

平成 25 年には、ＪＡいすみ管内のブルーベリー生産技術の向上による高品質生産の拡大と産地化を目指し、市場での有利販売を図り、農業所得の向上並びに地域産業の振興に期することを目的に、いすみ農協ブルーベリー出荷組合（以下「出荷組合」）を設立された。

22 名のメンバーで構成され、うちいすみ市の農家が 18 名加入している。毎年 7 月頃には、築地市場にある東京シティ青果へ行き、長野県のＪＡ北信州（中野市産）をはじめ、群馬県、栃木県、茨城県のものと見比べる研修を実施している。

振興会と出荷組合の活動は、それぞれ組織内にとどまっており、ブルーベリーの産地化に向けた具体的な取組みには至っていないようである。

３－３　市の農政職員が見る現状と課題－峯岸良行さん

私の住む地域は水田地帯であり、小学生ごろまでの昭和 50 年代前半までの記憶は、家族や親せきの人が総出で田植えや稲刈りをしていた。昭和 45 年ごろから田植え機やコンバイン等、農機具が機械化されたみたいだが、農家の生活は裕福ではなかったため、すぐに買える農家も多くなかったみたいだ。日本の高度成長により兼業農家も増え始め、農業以外の収入も得たことで、昭和 50 年代半ばにはほとんどの農家で機械を使った農法となり、労働時間も短縮され母たちも勤め始めたようだ。会社勤めの傍ら稲作を行うようになると、除草作業の手間を省くため農薬を使うようになり、また収穫量を増やし農業収入を上げるため化学肥料も使われ始めたようだ。

昭和 60 年代以降には、農業機械の購入費等の負担が農業経営を圧迫し採算がとれないようになり、稲作への生産意欲も低下し後継者も減っていった。

一方、ブルーベリー栽培においては、農業機械等の費用負担もあまり掛からず、栽培面積に対する収入が稲作より多いことに魅力を感じるが、仮に藤江さんを例に、兼業農家や農業をやめた勤め人等がブルーベリー栽培を行った場合、収穫期の 5 月下旬から 9 月上旬までの約 3 か月間においては、午前中 4 時間の収穫作業を行い、午後 2 時間程度の選別と詰込作業をすることになる。ブルーベリー栽培への興味や収入等のメリットを感じ取ることができた勤め人が、家族や子供たち等のために費やしていた休日を農作業の時間に充てることができ、平日にも必要な労働時間をどのようにして確保するかが解決されたら、ブルーベリー栽培に取り組む人も出てくると思うと話していた。

ブルーベリー栽培の収穫作業には相当の労働力と時間を要し、休日だけでは対応できないことから、兼業農家や稲作から離脱した勤め人には何が課題であるかを少しでも認識することができたような気がした。

３－４　ＪＡいすみの担当職員が見る現状と課題－寺家匠さん

ブルーベリーの出荷量は、平成 18 年で 1ｔであったが平成 27 年には 4.6ｔと、ほぼ右肩上がりで推移している。今後も出荷量を増やしたいＪＡいすみでは、出荷量が倍になっても十分捌けるが、ここ 5 年間伸び悩んでいる状況である。(表 3)

また、平成 27 年のブルーベリー100ｇあたりの平均単価は 158.7 円と、以前より下落傾向であるが、ここ 5 年間は横ばいである。(表 4)

平成 27 年夏、他産地と差別化を図る新たな試みで、糖度 12 以上で直径 18 ㎜以上の果実を厳選し、ＪＡのネットショップに完熟ブルーベリー1 kg（100 g ×10 パック）を 4,980 円（送料込）で初めて販売したところ、収穫が追い付けないほど好評だったそうだ。

現在、ブルーベリーの細かい出荷基準がないので農家には厳しいと思ったが、かえって上昇志向を促す一つのきっかけとなったのではないか。

ブルーベリーの購入者は女性が多く、ヨーグルトに合わせたり、パンにジャムをつけたり、ミキサーに牛乳と混ぜてスムージーにするなど、毎日でも食べられる健康食品として好まれていることもあり、女性の新規就農者が現れて欲しいと話されていた。

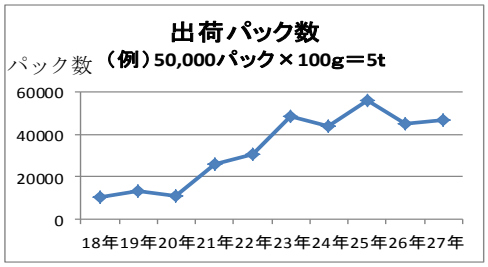

表 3　年度別出荷量（1 パック 100 g）
出所：ＪＡいすみ

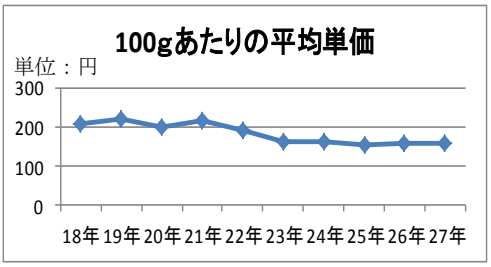

表 4　年度別平均単価（100 g あたり）
出所：ＪＡいすみ

３－５　千葉県夷隅農業事務所改良普及課職員が見る現状と課題－佐々木良規さん

ＪＡいすみへの出荷量 4.6 t で出荷額 800 万円では、まだまだ少ない。栽培面積も全体で 5ha では産地化という面積ではない。

ブルーベリー販売農家として経営主眼を市場出荷で考えるならハイブッシュ、観光や体験農園目的ならラビットアイと、比重を含めて選択する必要がある。

課題を挙げるとすれば、出荷量が極めて少ないこと。丁寧に収穫や選別、剪定作業をすることで栽培面積は増やせず、農家１件当たりの平均耕作面積は 2.5 反（25 a ）となっている。生きがいの延長として栽培を楽しんでいる部分が大きいように感じるため、農業で生計を立てることを目的とした農家を増やしていくことと、就農を希望する若い人を呼び込んでいきたい。

田舎暮らしに興味を持つ若者に収穫体験を通じてブルーベリー栽培の良さをアピールすることや、市内農家や就農希望者に興味を持ってもらえるように、ブルーベリーの魅力、面積に対する収穫量、売上見込額、労働時間、収穫や選別作業等を情報提供及び発信し、経営メリットを理解してもらう活動をしていくことが必要だ。

もう一つ挙げれば、ＪＡいすみの販売力向上への期待と、ブルーベリーの出荷基準を確立して欲しい。収入や栽培技術に対する農家の意欲向上を図ることで、出荷組合が活性化されるのではないかと話されていた。

４　ブルーベリー振興が直面している課題

ブルーベリー農家や関係者への取材から、いすみ市のブルーベリー振興若しくは産地化において直面する課題は、市場への出荷量が少ないことである。出荷量を増やすためには、

農の担い手を育成する具体的な取組みが必要である。

また、ブルーベリーの栽培面積に対する収入見込額や必要経費、ブルーベリーの定植や栽培方法、品種の選択、収穫までの樹木管理や剪定の方法、労働時間等の情報が外部に公開されておらず、ブルーベリー栽培のメリットやデメリットが知られていないことも挙げておきたい。

さらに、ブルーベリー栽培に興味を持つ人にとっては、収穫作業等に係る労働力や労働時間をどのようにして確保するかは、重要な関心事である。

もう一つ課題を挙げるとすれば、圏央道によるアクセス性の向上やいすみ鉄道の集客等により観光入込客数の増加を見込んでいるものの、交流人口の拡大等による外貨獲得に活かしきれていない。

観光摘み取り園への集客による外貨獲得を一部の農家が実施しているが、経営の柱となる実績には至っていない現状であるため、農家連携の強化と消費者への積極的なＰＲ活動を行う必要がある。

なお、いすみ市の観光に関する首都圏住民を対象としたＷＥＢアンケート調査（平成 25 年度）結果では、いすみ市の認知度は約 40％である。地域資源の認知度は非常に低く、最も高いもので「いすみ鉄道」が約 20％、その他はおおむね 10％となっており、地元が思うほど認知されていない。

５　ブルーベリー栽培の先駆的地域に学ぶ－木更津市：江澤貞雄さん

いすみ市のブルーベリー振興及び産地化への具体的取組みを実践していく上でぜひ参考にしたい先駆的地域が千葉県木更津市である。

今や日本全国の産地で栽培されているブルーベリーだが、千葉県内においてブルーベリーの産地化に取り組んできた木更津市は、現在、栽培面積約 15ha、年間約 50ｔのブルーベリー生産量を誇り、農協単位で全国 2 位、加工用（ジャムなどの原料用）を除くと全国１位の生産地となっている。ＪＡ木更津市ブルーベリー部会（以下「ブルーベリー部会」）へ加入する出荷農家は 50 戸で、ＪＡへ出荷して市場や加工用のブルーベリーの販売を行っている。

一方、平成 19 年に設立された木更津市観光ブルーベリー園協議会（以下「協議会」）は、8 つの観光ブルーベリー園（当初 5 つ）で組織され、木更津ブルーベリーのＰＲ活動を行っている。8 つの観光ブルーベリー園では、各園共通の入園料（15 歳以上 1,000 円、5 歳以上 500 円）で集客による経営を行っている。館山自動車道や首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東京湾アクアラインが交差する交通の要に位置する市内のアウトレット等へ協議会で作成したチラシを置き、内陸部の観光ブルーベリー園へ誘客している。秋にはブルーベリーの紅葉祭りを協議会で企画実施するなど、共存共栄を図っている。

昭和 58 年、当時の富来田（ふくた）農協組合長が同農協の営農指導員だった江澤さんへブルーベリーの産地化の話を持ちかけたことをきっかけに、木更津市富来田地域（旧君津郡富来田町）を中心に、組合長自ら率先して農家の会合に出向き、120 戸もの農家から借りた約 7ha の農地で農協職員を中心にブルーベリー栽培をスタートさせた。

その後、東京湾アクアライン開通が現実味を帯びてくることと並行して、農家に新しい農業形態としてブルーベリーの摘み取りを主とした観光農業を推進した。だが、後継者不足と農業離れが加速する中で農家の理解が得られず、自らが実践することでしか理解は得られないと一念発起し、平成 9 年 10 月に 50 歳で農協を辞め、所有する山頂の竹林を夫婦で伐採し、ブルーベリーを植えた。その後、毎年のように植え付けて、現在栽培面積約１.5ha（150a）のうち、20 a は贈答用やＪＡ出荷用のハイブッシュ、130 a は摘み取り用や加工用のラビットアイを植え、約 30 品種 1,500 本余りが繁茂する観光ブルーベリー摘み取り園「エザワフルーツランド」をオープンさせた。東京湾アクアライン開通（1997 年 12 月 18 日）から 4 年後のことである。

山頂におけるブルーベリーの定植では、通常土壌（PH5.8～6.0）であれば、樹勢の強いラビットアイなら人為的なかん水や土壌改良、化学肥料に頼らなくても生育することを実践し、「ど根性栽培」と称して極力樹木本来の力による省力栽培を確立している。

江澤さんの収入内訳は、苗木販売（40%）、観光摘み取り園（30%）、委託加工（20%）、果実出荷（10%）となっており、経営主軸は苗木販売と観光摘み取り園におき、作物はブルーベリーのみである。労働力は通常、夫婦と従業員 2 名とし、収穫期に入ると収穫作業のパート 6 名、週 2 回の草刈りパート 2 名、園の受付 1 名、ガードマン 1 名となっている。

エザワフルーツランドの平成 27 年の来客数は 3,032 人と、年々増加傾向にあるが、近い将来 10,000 人の来客を目指している。ちなみに 8 農園の合計来客数は、12,008 人となっている。

江澤さんは、これから最も伸びしろが大きいのは、大自然の中で来客に自分で摘み取ってもらう売り方とし、観光摘み取り園に期待している。無農薬、無化学肥料で水やりしない「ど根性栽培」で育てた安心安全で完熟したブルーベリーのおいしさに勝るものはないからと話されていた。

木更津市では市場出荷を主にするブルーベリー部会の農家グループと、集客による観光摘み取り園の経営を主にする協議会の農家グループに分けることができる。木更津市の協議会の農家は摘み取りを主にした観光農業を推進し、交流人口の拡大を図り、消費者から評価と認知を得ようとする役割を担っているのだと学んだ。

６　いすみ市でのブルーベリー振興と産地化に向けた取組み

（１）ブルーベリー栽培塾の開講

いすみ市でのブルーベリー振興における課題として、栽培面積も出荷量も増やすとなると、栽培農家の獲得と育成が不可欠である。

そこで栽培農家や関係者の協議の上、専業農家及び 50 代の兼業農家並びに新規就農希望者を対象とした栽培塾を開講し、担い手の獲得と育成をしていく。栽培塾では、ブルーベリー栽培に関する収入見込額や必要経費、定植や栽培方法、品種の選択、収穫までの樹木管理や剪定の方法等、また、すでに農業研修を受けた者がブルーベリー栽培の現地研修地として農家が蓄積してきた情報や技術を学ぶ場としたい。

初期投資額が抑えられ、高額な農機具を必要とせず、ＪＡいすみへの出荷により収入が

見込めるブルーベリー栽培は、特に新規就農へ意欲を喚起できるスタイルと捉え、青年就農給付金を活用しながら就農後 5 年間のうちに生活基盤の安定化と定着が図れるものとして勧めたい。

（２）観光摘み取り園の担い手育成と共存の仕組みづくり

観光摘み取り園による外貨獲得を経営の柱にしていく農家の育成と連携強化を図り、積極的に消費者へＰＲ活動を行っていく。圏央道による交通アクセス性の向上を活かして外貨を獲得することは、市場規模の小さいいすみ市の地域経済の活性化にもたらす効果は絶大である。

観光摘み取り園は、消費者に自分で摘み取ってもらう売り方で経営するため、栽培面積を増やすことを可能にするが、先駆的地域においても労働力と労働時間を軽減するまでには至っていないようである。ブルーベリー振興の仲間づくりとともに、多難を乗り越えていこうと思う。

おわりに

いすみ市は、首都圏に位置しながら、里山、田園、夷隅川、里海へと人々の暮らしに関係する資源を豊富に有している。中でも農地と人との関係は、古から育まれてきたにも関わらず、現在、関係性は薄らいでいく一方である。農地を農地として利用しなくなってしまっては、いすみ市の存在意義を失いかねない。

手段は多様にあると思うが、ブルーベリーをきっかけにして農の担い手と農村の活気を取り戻せるよう微力ながら関わっていきたい。

＜参考文献＞

○江澤貞雄（2014）『ブルーベリーをつくりこなす』農山漁村文化協会
○西下はつ代（2008）『ブルーベリーに魅せられて』創森社
○夷隅町（1994）『昭和の歩み・私の証言　夷隅町史資料集別巻』
○いすみ市まち・ひと・しごと創生総合戦略（2015）
○いすみ市地域振興対策プロジェクト報告書（2015）
○日本ブルーベリー協会ＨＰ　http://japanblueberry.com/
○木更津市観光ブルーベリー園協議会ＨＰ　http://kisarazu-blueberry.jimdo.com/
○株式会社わかさ生活ＨＰ　http://company.wakasa.jp/